

【22 有明フェリー Ariake Ferry】



長洲港沖の船上から

有明フェリーでは、長洲港～多比良港の航路上のあらゆる区間から“[北東面～北面の雲仙岳](#)”が眺望できます。フェリーの屋上部には展望スペースがあり、ここから眺める360度の有明海のパノラマは絶景です。(新船“有明きぼう”の屋上部には、長崎県立国見高校の美術部の生徒が描いたイラスト(↑)が花を添えています。)航路からは[阿蘇山](#)も眺望できることがあり、[阿蘇山](#)と[雲仙岳](#)の間の歴史的な[大三角形](#)(※阿蘇地域のページ参照)を視覚的にイメージすることが可能です。

本航路は、国道389号線の一部に位置づけられていますが、国道389号線は、雲仙天草国立公園を縦貫する道路で、大牟田市～長洲～島原半島～天草下島～長島～阿久根市と4県(福岡・熊本・長崎・鹿児島)をつなぐ道路です。この道路の通過市町村のうち、阿久根市以外はすべて[雲仙岳](#)が眺望できる市町村であり、ドライブしながら山の多様な表情を楽しむことができます。

平安時代初期(713年以降)に編纂された肥前国風土記において、長渚濱(長洲浜)を訪れた景行天皇(第12代)が対岸の[雲仙岳](#)をご覧になり、“あの山は島か半島か？私は知りたい。”と仰せになり、臣下を派遣して確認させたとの逸話が記されていますが、それを追体験できる航路と言えます。また、明治40年に西九州を周遊し、紀行文“五足の靴”を執筆した与謝野鉄幹や北原白秋ら5名の詩人は、島原港から長洲港へ小型汽船で渡る際に[雲仙岳](#)を眺め、「高く仰げば温泉ヶ嶽は、大いなる母の如く聳(そび)えて居る。」と表現しており、同じように追体験できます。

本航路では、↑の写真にも描かれたイルカの一種“スナメリ”が多く見られます。スナメリは、全国各地の干潟があるような浅い海に生息していて、有明海・橘湾では約3000頭が季節的に回遊しながら生息しているとされますが、波の静かな日にはフェリーから5～10頭のスナメリを発見できます。スナメリも多く生息する有明海の干潟は、全国一の規模を誇りますが、その泥は、かつての[阿蘇山](#)の大噴火による噴出物を筑後川や菊池川、白川などが日々流し込んでいるもので、その泥が外洋に流れ出さないのは、[雲仙岳](#)そびえる島原半島が有明海の水の出入口を狭めているためです。

[雲仙岳](#)の様々な表情を探しながら、有明フェリーで旅してみませんか？

●有明フェリーの情報はこちら ⇒ 有明海自動車航送船組合 <http://www.ariake-ferry.com/>



長洲港フェリーターミナルから



長洲港から